
梅の花

朝野光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅の花

【Nコード】

N8095T

【作者名】

朝野光

【あらすじ】

研究所に男が2人。今日もパソコンの画面を見つめていた。

(前書き)

三題漸です。お題は『梅』『核兵器』『ネズミ』。

1時間30分でなんとか書き上げました。

ご感想をお待ちしています。

研究所の明かりは独特だった。

外界からの影響をできるだけ遮断した造りに、建物内には風もな
く、音もない。弱々しく灯る電灯だけが光源といえた。

小さな研究所に今日も2人だけ、パソコンに映し出されるグラフ
を眺めている。

薄暗い部屋に対照的なパソコンの光はふたりの瘦躯を不気味に照
らし、変な言い方かもしれないが真っ白な白衣とでもいおうか、や
つれた2人に似合わずシワ1つない白衣に反射し、眩しいというて
もいいくらいだった。

「変わりませんねえ」

2人のうちの1人がそうつぶやいた。少しだけ浮いた口調から、
年齢はまだまだ若いと思っていいいのだろうが、なにしろ老けている。
画面から目を離そうとはしない。

「そう簡単に変化などおきないよ」

かなり歳をとっているに見えるもう一方が、その言葉に返答した。
しわがれた声には無駄な感情をそぎ落としたような鋭さがあり、そ
して冷たかった。

それ以外に2人に会話らしい会話はなかった。

「おっ」

「ふむ」

「なるほど」

まるでこの世界が自分たちとその数値のみに支配されているよう
な生活。

朝目が覚めては研究所に赴き、夜も更ければ家へ帰っていく。

彼らは実のところ、自らの知的好奇心を駆り立てる新たな研究に
没頭しているわけではなかった。小さな町の小さな研究所には、大
きなものを開発する設備はない。あると言えば最近買い換えたコー

ヒーターカー、予備に用意してある電灯に白衣、そして、原子の核反応を誘発する実験装置ぐらいなものだった。「こんなこと、いつまで続けるんですかねえ」

「……死ぬまでだろう」

「まあそうなんでしょうねえ。自分は別にかまいやしないんですけどね」

「私もだね。どうせ世間様にも疎まれるようなことをやっているんだ」

2人の会話がなぜか今日は弾んでいた。

それは先程淹れたコーヒーがたまたまおいしかったからかもしれないし、2人の親戚のどちらかにいいことがあったのかもしれないし、今日は冬の寒さが緩み、少しだけいつもより暖かったからかもしれない。

小さな研究所に籠る2人に季節感覚などなかった。温度は認知できる。

寒い、暑い。

しかしこれに感情の変化は伴わない。冬だ、夏だと感じる必要はないのである。寒ければ服を着るし、暑ければ服を脱ぐ。それは季節感覚というにはあまりにも粗末なものだった。

若めな男は画面から目を離し、驚いたような口調で言った。

「あれ、所長疎まれてると思ってたんですか」

「当たり前だ」

「なぜ？」

執拗に無駄な質問ばかりする助手に嫌気を感じながらも、所長は鋭利な刃物のような言葉をもらした。

「この国の人間は核が嫌いだからな」

「……所長は？」

助手はさらに続けた。所長のように長年核にのみ触れてきた人は、どのような気持ちで核と接しているのか。自分には、推測さえできない感情だった。

いや、そもそも所長に感情がない、所長から感情が感じられないからこそ、わざわざ言葉にして問わねばならなかったのかもしい。

「核は必要のないものだ」

若い男は息を飲んだ。固唾が音をあげて胃に落ちる。

「自分たちは、それを研究しています」

「研究？ 作動実験にすぎない」

「……」

「君は核が好きかね？」

所長が画面から目を離し、助手に一瞥を投げる。研ぎたての刃物を喉につきたてられている感覚が助手を襲う。「核には抑止力がありまして」

「好きかねと訊いているんだよ」

「……」

「君の気持ちもわかるよ。核を肯定できなければ、自分の存在理由がなくなる。何年もこんなことやってきたんだ。合理化だつて必要だろう」

若い男は言葉を一言も発せなかった。自分は核が好きなのか嫌いなのか。核を否定することは、自分を否定することではないのか。自らの感情さえもわからないのに、所長の感情を理解できるはずもなかった。

「戦争は核兵器がなくなつてできる。人間は時に、感情だけでも戦争ができてしまう生物だよ」

「ではなぜ核兵器が生まれたのでしょうか？ 必要がなければ生まれなかつたのでは？」

「たまたまだよ」

「………？」

「君は子供の喧嘩を体験したことはあるかね？ 木の棒で戦っていたでしょう。近くに鉄の棒が落ちていたら、君はそれを使って戦うだろうね。それと同じだよ」「そんな、子供と同じなんて」

「同じだよ」

チチチッ

「君は早いところここを去るのがいい。そんなに核が好きならもつと大きなところに行けるよう、私が紹介してあげよう。こんな古くておんぼろな研究所にだっていたくないだろう」

ちょうどその時、パソコンの画面が実験の終了を告げた。内容は昨日と同じ『正常』。誤作動なんて普通起こるものではないのだ。ここは数々の研究所の一番端、最も安全なものと検証されたものがやってくるのだから。

助手は考えが整理できないような面持ちでその情報を目に入れていた。

『正常』

この字を見るだけに自分は存在するのか。いやそもそも自分は核を必要だと思っているのだろうか。季節だってわからない、今日がいつかもわからない、今が何時かもわからない、親の顔も忘れてしまいそうな自分は、果たしてこのままでいいのか。

チチッ、チチチ、チッ

作動確認が終われば静寂を貫くはずの研究所に、不可解な音が響いた。

「ネズミ？」

パソコンに結果を打ち込んでいるらしい所長が少しだけ顔をこちらに向けた。

「ネズミはダメだよ君。捕えよう」

部屋の少しだけ開いていたドアの間から何かが逃げていった。

若い男と年老いた男が、ネズミを追いかける。

(変だな……)

若い男はおかしいと思った。可笑しいのだ。

先程まで無味無臭、乾燥しきっていた研究所に、やんわりと明かりが灯った気がする。それは何の変化だろうか。あの堅物であった所長が一生懸命にネズミを追いかけているからだろうか。

それとも、自分の中で何かが変わったとでもいうのか。今日は昨日と変わらず、一昨日と変わらず、1ヶ月前と変わらず、去年とも変わらない1日だったはずなのに。相変わらず今の季節だってわからない。

走り出して少しばかり体が火照っているのはわかる。体を動かすのはいつぶりか。

若い男は隣を走る所長に視線を向けた。なかば諦めているような顔で息を切らして走る彼が、助手にはただの初老の男に見えた。いつもなら畏怖さえ覚えるその姿も、ネズミを追いかけてはただのおっさんだ。

「あつ！ 入口の壁に穴があいていますよ」

「そこから入ったのだらうね。塞いでしまおう」

「じゃあ外側からなんか貼りましょうか」

助手は勢いよくトビラをあけた。

ブワッ

溢れんばかりの光が、風と共に音を出して飛び込んできた。

実験内容上、人が多く住むところには研究所は建っていない。目の前には真っ青な芝生が広がり、ぽつぽつと木が植えられていた。正午の日差しは強く、程良く乾燥した空気がベタつく肌をふわりとなでる。

見慣れたものはずなのに、その目の奥を突き刺すような光景をぼんやりと眺めていると、ふとある香りが鼻腔をくすぐった。

研究所入口のすぐ隣。そこに1本の梅の花が咲いていた。

桜とも違うあざやかなピンク色が、長い年月を経て出てくる重さ

のようなものを感じさせる。

「所長」

「……なんだね」

助手は同じように景色を眺めていた所長を振り返る。そこにはいつもと変わらない鋭さがあった。

「自分はまだ核を肯定できませんし、否定もできません。まだわからないのですよ」

「うむ」

「でも、まだまだこのままでいいんじゃないかと思います」

「……そうか」

それきり所長は口を開かなかった。同じように梅の花を眺めている彼は一体何を考えているのだろうか。若い男は考えた。でもわかりはしないだろう。

また、訊けばいいのだ。

所長の感情が知りたいならまた訊けばいい。今日のように。彼にも感情はあったのだから。

「梅が咲いていますねえ」

「そうだな」

ネズミを追いかけた所長は、確かに人だった。助手が思う所長とは、この梅のようなものなのだろう。あざやかで、研ぎ澄まされていて、そして気高く美しい。

「春なんですね」

所長は梅を見上げていた顔を助手に向けた。

「そうだな」

シワが彫り込まれたその顔が、笑顔でさらにくしゃくしゃになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8095t/>

梅の花

2011年6月4日12時25分発行